拝啓

昨日仙台で貴女様の御来
軒中と承り候へ共、たのしく
逢はずあの御傳言致し候
さて三月十三日無事帰宅
東港完了致候
ましたが御家下さいませ
こか　　之は私にて重要な
御でしたのでしたすから御返
そおまくしていたのですが今
御返事も出さず殘念千万
昨年御持参以来私の信
も大分進歩をみ目下国内
であの様子をみ方申した
美の湯を用ゐる屏風を
作り一百丈以上御商
相成り製作中です
それで之を東港完了
御送りしてみる つもりでおり
ましたが御来軒中なれば
内地で御送に入れたく存じ
のでそれを思ひ御返事
私としては昨日
一体自分おいで下さってその
他の資料も御みせいたしたく
御送意味ご御事来の為を
得たく思ひ居り　若しいけ
ばかりの事ならば東京へ来て
もお逢ひしたく存じ
先ずは御今日御迄
何分の御返事おまち申
六月四日　伊藤長七

子爵大鳥圭介様

奥州仙臺紙子　解説

我國では上古以來、東洋特産植物「かぢの木」の表皮を利用して、たく布や木綿を作り妙を織つて麻其他の植物繊維と共に衣料として着用して來た。奈良朝に中國から製紙法を傳えて後これを製紙原料に使用して強靱な日本紙を産み、衣料面の用途は忘れたかと思われたが、植物性フェルトである紙は再び着物に使われて紙子（紙衣とも書く）となり、或は紙絲を織つた紙布織として夏の禮服や浴衣厚司や帶地其他に使用された。自家用に手作りされた紙子や紙布織は日本各地にあるが、この兩種を名産品として世に送つたのは奥州仙臺領白石卽ち宮城縣白石市であり、その質は平安朝に淸少納言が賞美した陸奥紙の特質を其儘保有發揮してふくよかに強く美しい。

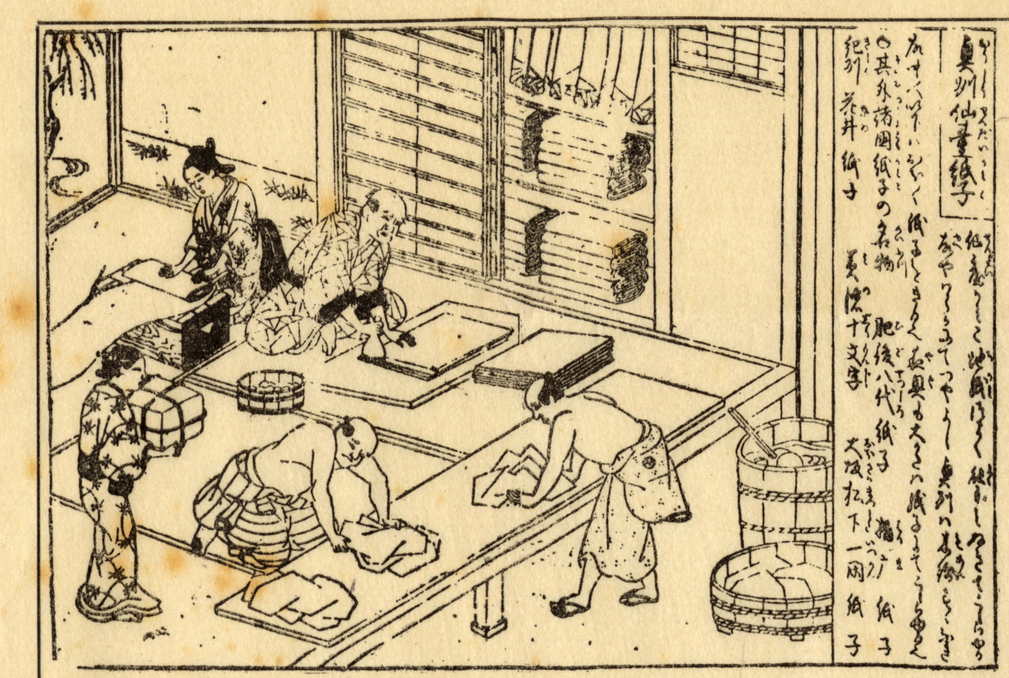
紙子は支那僧から傳えられた。奈良東大寺では一千年の昔から、二月堂の「お水取り」の修練には練行僧自ら和紙を揉んで着物に仕立て、着用する風習が、連綿今日も尙行われている。それが鎌倉室町時代に至つて此の宗教的な用法は更に轉じて、和紙の輕さ・强靱さ・保溫性を生かして、高德の隱士達が「わびさび」の境地から、或は絢爛にあいて紙子を着用した。「勿體なや祖師は紙子の九十年」と親鸞上人を詠んだ句佛上人の句は有名である。

米澤市上杉神社に殘る上杉謙信公の紙子の胴服は室町時代の原型を完全に傳えている。柿澁茶色無地の和紙に萌黃の絹裏の綿入仕立で長い襟と袖口は金襴を使用した大振り豪快な品である。又天正十八年小田原陣の際靜岡丸子の宿、宇津の谷峠で石川忠左衛門に褒美として與えた豐太閤の紙子は、ちりめん樣の白紙子綿入れで紅花染絹を裏地とし、裏地を更に表へ廻して襟と袖口にしてそれに菊と細綾形を刺繍し、紐は紅絹の共裂に桐紋を摺箔で置いた桃山特有の豪華さを現している。今子孫が所持し「お羽織屋」の名で名物になつている。慶長元年（一五九六年）伊達政宗が豐太閤から拜領した紙子も恐らく同樣の品かと想像される。此の樣に戰國武將にも愛用されるに至つた。

江戸時代に入り、初めて模樣を附けた紙子が現われ、和紙生産の普及と共に廣く一般庶民大衆の冬の防寒着として愛用された。芝居の夕霧伊左衛門のうらぶれた紙子姿が代表するように、西鶴や近松の文中によく見出され、「仙臺の淨瑠璃聞かん紙子売り」の花畝の吟を始め、芭蕉や當時の俳人達は多く紙子を着、よく句に吟じているのは如何に紙子が大衆に愛用されたかを證するものであろう。

紙子は享保四年（一七一九年）刊「奥羽觀跡聞老誌」其他多くの本に登載されているが、「日本山海名物圖繪」（寶暦四年（一七五四年）刊）には『奥州仙臺紙子　夜具も大かたは紙子にてこしらゆる也　○其外諸國紙子の名物　肥後八代紙子　播摩紙子　紀州花井紙子　美濃十文字　大坂松下一閑紙子』とあつて、仙臺紙子が最優秀の代表として其作製場面が左圖のように描かれている。文化・文政頃（一八〇四―一八二九年）京都紙屋十兵衛の紙子の目錄には肥後・播摩産と共に「極上仙臺紙子」と記してある。東海道阿倍川・奥州相馬中村も亦紙子の産地であつた。

芭蕉が奥の細道の旅に着たのは、どんな紙子であつたか今は知るよしも無い。芝居では手習草紙で作つたような大文字を書いた紙子



が現われるが多くは柿澁無地染の地に黑木綿の肩當が付いている程度のものである。殘存する紙子の模樣は型紙染めによる小紋染や後には更紗模樣等も見られるが、白石の製作資料は極めて乏しい。安永七年（一七七八年）「仙臺藩風土記書上」には白石本郷・藏本村・森合村等から紙布・紙子・羽二重紙子を産したとあるが、羽二重紙子と云う高級品らしい物は勿論紙子の殘存品は未だ見出し得ないが、苦心探索の結果、昨年漸く櫻板に模樣を彫刻した紙子の型板二枚（長五尺四寸七分・巾一尺二寸七分・厚さ八分・兩面に二種の異る圖案を彫る）と廢業後それ等を佛壇の扉や重箱・引出に改造した斷片資料十七種類を次々と發見した。彫刻は白石城下短ケ町住版木師高橋家代々の作。麻の葉・雷紋・錢形・格子・七寶・其他當時江戸流行の圖柄と白石獨特のそれとを含んで居る。白石では深山、大車の佐藤家が古く京大坂方面と紙子商売を行ひ、森合佐久間家は明治初年最後迄紙子作りを行つた一軒である。

目下文部省の選擇により無形文化財技術記錄作製中の白石名産紙布織と共に三百年の傳統を誇る白石紙子の如き工藝美術産業は、天正年間豐太閤に箱根底倉蠶居を命ぜられ乍ら尙、千利久に茶を學んだ藩祖伊達政宗以來の殖産興業政策と中央文物の吸收同化を企途する指導精神の下に白石片倉小十郎景綱以來の英邁と領内住民の手に發達した仙臺藩文化を如實に表現する一つで、伊達模樣と稱するに足るものであらう。

當所は廿余年に亘る鄕土工藝技術の研究の結果になる植物染料と白石産良質和紙に依り紙子を再現し、是等優秀圖案を活用して胴服・茶羽織を始め襖・表具・裝幀・室内調度茶道用具其他海外向工藝品を試作中であるが風爐先屏風は裏千家淡々齋宗匠の御指導によつて完成した次第である。

昭和三十年四月

奥州白石鄕土工藝研究所
所長　片倉信光
拓紙　佐藤忠太郎
抄紙　遠藤忠雄
宮城縣白石市中町三三

東京都千代田区神田
駿河台二の一一、日本聖書
又葉港の
気付
高橋友枝様
至急

Received 6/June 65

六月四日

長崎縣白石市中町三三

佐藤吉太郎